

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	教えずに学生の学びを手助けする 能動的学修への転換再考
別タイトル	The practice of helping students learn, without teaching Reconsideration conversion to active learning
作成者（著者）	廣井, 直樹
公開者	東邦大学医学会
発行日	2021.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 68(2). p.27 27.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2020 035
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD07874925">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD07874925</a>

## 教えずに学生の学びを手助けする —能動的学修への転換再考—

廣井 直樹

東邦大学医学部医学教育センター教授

「人生100年時代の社会人基礎力」は、平成18年に経済産業省が提唱した「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を平成29年に再定義したものである。「前に踏み出す力（一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力）」、「考え抜く力（疑問を持ち、考え抜く力）」、「チームで働く力（多様な人々とともに、目標に向けて協力する力）」の3つの能力が示され、その中に12の能力要素が示されている。これらはいずれも知識の蓄積ではなく、実践力として提案されている。医師として身につけるべき9つの能力と資質を「医学教育モデル・コアカリキュラム」では提示している。この中で知識は1つの領域のみであり、技能と態度の修得に重きが置かれている。このような統合された能力を高めるためには、自己実現のための目的設定と生涯学修の姿勢を身につけ、どのように学ぶかを繰り返して考え（自己省察）ながら、学び続けることが重要である。これらは知識の蓄積だけでは不十分である。自らが実践し考えることで修得可能なものであり、社会人基礎力と共通するものと考えられる。

これまでの本邦の医学教育では知識の修得に重きが置かれ、技能や態度の教育が不十分であったことに異論はないだろう。情報や知識に簡単にアクセスできる現代においては、知識や情報を教えることの価値は低下しているといわざるを得ない。教えるためには、教える人が教わる人の持っていない知識を持っている（正解を持っている）ことが不可欠であるが、医学知識の倍化時間が73日といわれる現在では、全ての医学知識を習得し知識を他人に教えることは困難となっている。本邦の医学教育改革は、Educational Commission For Foreign Medical Graduates (ECFMG)の宣言をきっかけに加速したが、すべてを教えることが困難となった中、学修者に求める能力が変わっていくのは明々白々である。すなわち、「医師として活躍するという使命感や利他性」、「全人的な医療を行うための人間性」、「卓説性を求める学修姿勢」、「なぜかと問いかける批判的思考力」の

修得など、倫理観の涵養やプロフェッショナリズムに関する能力の修得に重きが置かれるようになってきた。

学修者が自ら学ぶことが求められる中、平成26年の中央教育審議会(中教審)答申「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」でうたわれた初等中等教育での能動的学習の推進は、令和4年には高等学校で全面实施となり、令和7年にはその学びを経験してきた学生が大学に入学してくる(移行期間を含めると令和4年の可能性がある)。これの意味することは、「教えられ覚える授業」ではなく「自ら考えて学ぶ授業」に慣れ親しんだ未知なる学生との遭遇である。本学では10年以上前から課題解決型学修や自己主導型学修、診療参加型臨床実習を推進してきたが、重要なことはさらなる「学ぶ側の主体性を尊重した学びの場の提供」であろう。平成24年の中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」で打ち出された「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修への転換」という大学教育改革の原点に基づき、医学教育について見つめなおす時ではないだろうか。

東北大学名誉教授であった林竹二先生は「学ぶということ(国土社)」の中で、「学んだことの証しはただ一つで、何かがかわることである」と述べている。すなわち教育の成果は、知識の蓄積ではなく、学修者の行動変容があって初めて成し遂げられたと考えるべきである。本学では令和4年に医学教育分野別評価受審予定である。教員が今の教育の問題点を自ら見つけ出し、教える教育から脱却する必要があると感じている。学修者の行動変容を促し、それを評価する教育になっていかなければ、これからの医学教育に取り残されてしまうのではないかと強く思うこの頃である。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2020-035